

棚橋先生の授業化

—私はこうコミュニケーションする—



発問・指示を明確にし、授業の組み立てを変える

谷 和樹

社会科は道徳ではない。

「社会の姿や変化をとらえる力をつけることが社会科の学力形成である。」とする棚橋氏の意見に賛成である。

棚橋氏が述べるように、向山周慶の「生き方」ではなく、周慶を通して見えてくる「社会」を、説明的な知識としてわからせるのである。

そのことにより「自給自足経済から商品貨幣経済へ社会が変化した」という概念的な知識へつながることができ構成になっている。

したとしたら、子ども達は動かない。

もちろん、棚橋氏は実際にこの通りに言うことをイメージしたのではないだろう。しかし、教室での授業者にとって「第一指示」は曖昧にできないところだ。

指導案の「教授・学習活動」には「P：向良神社を調べたグループを中心に周慶の事績の概略をエピソードを交えて簡単に説明する。」とある。

つまり、授業の最初、「子どもの発表」から入ろうとするプランなのだ。

このまま私が実際に授業をするのであれば、教師の第一声はたとえば次のようになるはずである。

Aグループ、前へ出ていらつやい。向良神社を調べたAグループの人たちに発表してもらいます。どうぞ。

この知識そのものの検討については、本稿の趣旨ではないし、論するための準備も私にはない。

棚橋氏の論文は、社会科で人物を扱う際におちいりやすい陥穽を指摘している。さらに、代案も示している。その点で高く評価できる。

二

ところで、今回私に与えられた課題は「棚橋氏の指導案を、実際に授業化するとしたら、どのようなプランになるのか、コミュニケーション」ということである。

これで、子ども達はあらかじめ準備した資料を提示しながら、練習した通りに発表するであろう。

ただ、通常、私はこのような導入をしない。前時の続きとして、「討論」から授業を始めることはあるが、子ども達のグループ発表から授業を始めることはない。子ども達の発表から授業を始めると、授業開始の緊張感が弛緩してしまうのである。

授業の導入で、教師がどのような言葉を発表するのかということは、極めて重要である。

このように、最初の指示から私はひっかかってしまい、なかなか先へ進まないのである。

三

棚橋氏のメインの発問は次の通りである。

すなわち、棚橋氏の指導案を「授業」という観点から再構築せよということであろう。

そこで、自分がこの指導案で授業をするなら、と考えながら指導案を読んだ。読んでみて、まず思ったのは、「このままでは授業できない」ということである。一つ一つの指示・発問が粗いのだ。最初の指示は次である。

調べてきたことをもとにして、周慶たちの働きをまとめてみよう。

授業の冒頭で、本当にこの通り指示

江戸時代の讃岐に砂糖づくりをあたした周慶が、神様とまで言われてありがたがられたのはなぜだろうか。

この発問は、わかりにくい。指導案に書かれているように、「農民を助けた」「暮らしやすい良所に変えた」という意見しか出ないだろう。

その直後に、「砂糖づくりが行われるようになって、その頃の社会はどのように変わったのだろうか。」という発問を追加する。この発問は大きすぎるため、答えようがない。

そこで、指導案では、その後次々に「発問する」「予想する」「説明する」を繰り返して進むことになる。

授業の設計としては、論理の筋は通っている。しかし、もしも実際に教室

で授業をすれば、よほどテンポよく進めない限り、ややだれてくると噂れる。ところが、この同じ発問が、授業の「終結」部分では、次のようになっている。

江戸時代の讃岐に砂糖づくりをもたらした周慶が、神様とまで言われてありがたがられたのは、周慶らはたまたまで社会がどのようなになったからだろうか。

導入の発問と、終結の発問は、明らかに質が違ふ。

終結の発問の方がよい。

ただし、これをそのまま尋ねたとしても、棚橋氏が書かれている次の知識は、子どもからは出にくい。

自給自足の生活から、お金を儲

けられ、書き方のフォーマットも示す。たとえば、

私は、「自給自足の社会」から「○○○○の社会」へ変化したと考えます。
その理由は、

のようである。

四

私が棚橋氏の指導案で授業するとして、実際の流れは次のようにしたい。

① 向山周慶の紹介

資料を提示して、向山周慶と砂糖作りについて教師が語る。提示する資料は「向良神社」の写真等と、向山周慶、関良介などにまつわるエピソードとなる。当時の砂糖の値段や、「和三盆」の名前の由来等にも触れたいところで

けるために作物を作り、必要な物はお金で買う生活に変わっていき、生活が豊かになった。

結局、教師が説明して終わるより他にないだろう。なぜか。

授業の中で、「自給自足」について「資料などから具体的に扱う場面」がないからである。棚橋氏はこの単元の前半でそれを扱うことを前提にされているのかも知れない。

「展開」の中にある「それまでの農民はどのような暮らしをしていたのだろうか」という発問で、グループが発表することになっているが、そこには自給自足の生活は出てこない。

「農民の暮らしはどのように変わったのだろうか」という発問のところで、「自給自足」の説明が行われるようだが、具体的ではない。

ある。

② 自給自足の定義

「当時の農民は『自給自足』の生活でした。『自給自足』とはどのようなことですか。事典やインターネットで調べてもらなさい。」

③ どのような社会に変化したのか

先に示したメインの発問をする。その際、棚橋氏が提示した資料やその他の資料を、教師から簡単に解説しながら提示し、すべて使ってよいことにする。(里唄、高松藩の財政状態の変化、大阪の蔵屋敷、高松藩の年表、砂糖の値段 等々…)

④ 発表

先のフォーマットでノートに書いたことを、指名なし発表させる。

⑤ 教師によるまとめ

たとえば、「自給自足の社会」から『お金で売買する社会』に変わってい

また、棚橋氏の発問には「作業指示」がない。だから子ども達の動きが漠然としている。

私なら、メインの発問は次のようにする。

このような社会を「自給自足の社会」と言います。

江戸時代の讃岐に砂糖作りをもたらした周慶が、神様とまで言われてありがたがられたのは、周慶らはたまたまで「自給自足の社会」から、「違う社会」へと変化したからです。

どのような社会に変化したのですか。

自分の考えを、証拠の資料をもとにしてノートに書いてもらなさい。

つたのですね。」のようになる。

⑥ 発展

「このような藩が他にもあったのです。たとえば『阿波の藍』等です。百科事典やインターネットで調べてもらなさい。」

五

このような郷土の人物を扱った授業は「さとうきびづくり」や「砂糖づくり」の体験学習に逃げたり、偉人に感心し、感謝して終わったりする道徳的展開になりがちである。棚橋氏の指導案は、そうした人物中心の社会科授業に対して私たちがもっていたモヤモヤを、明確にしてくれたような感覚があった。「授業化」を考える作業も楽しく、勉強になった。感謝したい。

〈兵庫県加東郡龍野町立龍野南小学校〉